『三教指帰』から読み解く空海誕生の時代背景
――生誕1250年によせて

藤井　淳（駒澤大学教授）

生誕1250年によせて

2023年は空海生誕1250年にあたり、弘法大師空海を宗祖とする真言宗では関連する法要が行われる。本稿では筆者が2022年に上梓した拙著『空海 三教指帰 桓武天皇への必死の諫言』（慶応義塾大学出版会）をもとに、空海の若き日を描きたい。空海は一般に最澄とともに平安仏教の代表者とされる。最初に空海は都がまだ平城京にあった774年、奈良時代に生まれたことに注意したい。つまり空海は20歳の時に桓武天皇によって平安京に都が遷されるまでの過程をつぶさに目の当たりにしていた（本書では現在の年齢計算で記述する）。空海誕生時の天皇は桓武天皇の父・光仁天皇で、桓武天皇が即位したとき、空海は７歳であった。後の記述とも関わるので、光仁天皇・桓武天皇が即位した背景について簡単に紹介しておこう。壬申の乱以降、乱に勝利した天武天皇の血統によって皇位が継承されていたが、道鏡との関係で知られる孝謙女帝が崩御した後に、天智天皇の血統としておよそ100年ぶりに擁立されたのが光仁天皇である。空海の若い時代にはこの天智・天武系の対立が背景にあり続けた。これは後に見ることにしよう。古代には自分の出身氏族が何であるかが自己の意識を規定した。空海の若き日を理解するためには、出身氏族が置かれた時代背景を理解する必要がある。

本稿では、空海の著作として著名な『三教指帰』の方ではなく、『聾瞽指帰』の名称を多く用いる。空海が23歳の時に著した名称は『聾瞽指帰』であった。40歳を過ぎた後に一部を書き改めたのが『三教指帰』である。両者を比較するとごく一部の語句の差にすぎないが、その違いを比べると空海の若き日の

意識が垣間見えてくることは後に述べたい。

佐伯氏・大伴氏――神武天皇に忠を尽くした古代氏族

空海の出身は讃岐（現・香川県）の佐伯氏である。讃岐の佐伯氏は中央の佐伯氏からすると傍系でその支配下にあったとはいえ、讃岐の佐伯氏出身であることは空海にとって決定的な意味を持っていた。空海の父の名前は佐伯田公である。これは応天門の変で失脚することになる、伴善男が讃岐の佐伯氏の家格を高めるにあたって、「大伴氏の家記を確認して誤りがない」と奏上した文書に見られる。なぜ佐伯氏の家格向上のために大伴氏の家記を確認したかと言えば、古代の名族・大伴氏（大伴氏は伴氏と改姓）と佐伯氏は同族の伝承を持つからである。この同族伝承は大伴家持の歌にも見え、空海自身も『性霊集』で記している。

佐伯氏と同族である大伴氏について少し詳しく見ておこう。空海は系譜として大伴氏の祖を持つからである。大伴氏の祖・日命は『日本書紀』において八咫烏に導かれ、神武天皇の大和入りを妨げる土豪を撃破して、神武天皇を即位させたという伝承を持つ。神武天皇から日命は忠をもって讃えられ、大和に導いたことから道臣と呼ばれた。これを象徴して、大伴氏と佐伯氏は天皇の即位に関わる一連の儀式で南門を護衛するという役割を担うことになる。古代宮城の最も主要な正面の門は大伴門と呼ばれ、佐伯門も十二門の一つである。さらに大伴氏の祖がヤマトタケルの東征に従ったことは『日本書紀』に記され、『性霊集』にも記される。空海は軍事をつかさどる祖先が天皇の東征に従ったことを暗示する句（武人東征）を含む『詩経』の詩を『聾瞽指帰』の序で用いている。

大伴氏が天皇に対して最古の忠を果たしたということは歴史的事実というよりは壬申の乱後におこなわれた『日本書紀』の編纂と関係が深い。大伴氏は大伴金村という有力者が蘇我・物部氏の台頭によって隠棲させられた後、影響力を失っていた。さらに大伴氏は大和を拠点としており、天智天皇が近江に朝廷を遷すことに消極的で大和に残りつづけた。つまり金村以降、大伴氏は古代の

「仏教のすすめ2023年版」
（仏教書販売研究会2022年10月1日発行）より転載

軍事氏族として名門でありながら日陰をかこっていた。

天智天皇が亡くなると、弟の大海人皇子（天武天皇）は天智天皇の子・大友皇子に反旗を翻し、壬申の乱で勝利した。この大海人皇子に一族の命運をかけて支援したのが大伴氏である。その後、天武天皇の余光が残るしばらくの間、大伴氏は政治的にも重要な地位を保持していた。天武天皇によって始められた歴史書の編纂が『日本書紀』として結実する。大伴氏が神話で最古の忠を果たしたとされるのは壬申の乱で天武天皇を支援したことが最も大きい。

しかし、天武天皇の血統は女性が多かった。奈良時代に女性天皇が多かったことを思い起こす人もいるだろう。女性天皇によってなんとかつないできた天武天皇の系統も孝謙女帝が崩御することによって大きな動きがでる。藤原百川が光仁天皇を擁立し、ここに皇位が天智天皇の血統に戻ることとなった。そして大伴・佐伯氏は壬申の乱の功績の記憶が薄れるとともに、多くの政争に敗れ続け、落日を味わっていた。そのような時期に空海が生まれた。ここで確認すべきこととして、空海にとって天皇に命をかけて忠を果たすことは一族の誇りであり、それを子々孫々、続けていくことが孝に他ならなかった。しかし、天皇と古代豪族の関係は次第に武力に基づく結びつきからドライな官僚制度の整備へと移行しつつあった。その中で古代の軍事氏族としての大伴氏・佐伯氏は過去の役割を終えつつあった。

桓武天皇とその二大政策「軍事と造作」

先ほど述べたように空海が７歳のときに桓武天皇が即位した。空海が30歳で入唐するときも桓武天皇の治世であり、天皇の死去は空海の入唐中のことであった。今まで空海と天皇との関係は嵯峨天皇や淳仁天皇との交流が語られることがあっても桓武天皇との関わりが語られることはなかった。それは空海が入唐するまでの若い日に書かれた文章は『聾瞽指帰』の他にはなく、ほとんどの文章は入唐後に著されたからである。しかし私は『聾瞽指帰』は桓武天皇に対する諫言として全編が著されたと考える。

桓武天皇は日本史上において稀代の専制君主であった。桓武天皇はその母が

帰化系で身分も高くないことから、天皇として即位することなど当初は誰も予想していなかった。しかし、当時の陰湿な政争の結果、棚からぼたもちともいえるほどの運命で天皇に即位することになった。強固な支持基盤を持たない桓武天皇は母方の出身である帰化系氏族を側近として重用していった。これは古代より大和を拠点とし、また天武天皇以降、影響を持ち続けていた大伴氏に対して距離をとっていくことでもあった。それが具体的に現れたのが「軍事と造作」と呼ばれる蝦夷征討と長岡京・平安京への遷都という二大事業であった。この二大事業の過程で古代の名門である大伴氏・佐伯氏はその没落を決定づけられることになる。

蝦夷征討と藤原種継暗殺事件

空海の後年の文章からは蝦夷を蔑視するかのような表現が確かに見て取れる。しかし実際は空海の出身である讃岐の佐伯氏は蝦夷と関係が深かった。捕虜として讃岐を含む西国に配置された蝦夷は佐伯部と言われた。蝦夷が分からない言葉で“さわぐ”のが佐伯の語源とする通俗解釈は『日本書紀』に見られる。空海の出身の佐伯氏はその蝦夷の捕虜を統括する立場にあった。空海自身に実際に蝦夷の血が流れていたかは分からないが、空海が生まれた2年後にも讃岐に蝦夷の虜囚が配属されたこともあり、空海自身は自分に蝦夷の血が流れることを意識していたであろう。『三教指帰』で空海は自画像として仮名乞児を登場させている。その容貌の一つとして「足が（バランスを欠いて）長い」と描いている。これは中国では蜘蛛を指す形容であり、朝廷に従わなかった土豪である土蜘蛛の特徴を明らかに意識して描いたものであろう。土蜘蛛は『常陸国風土記』で佐伯ともされている。

神話時代のヤマトタケルの東国遠征に従った伝承を持つ大伴・佐伯氏は東北地方に代々、将軍として派遣され、捕虜とした蝦夷を自分たちの配下にしたり、蝦夷に一定の自治を任せたりする緩やかな共存策をとっていた。それに対して桓武天皇はその父・光仁天皇とともに蝦夷を朝廷の直接支配下に置こうとした。大伴氏を始めとする将軍は、光仁・桓武天皇より「蝦夷征討に積極的で

「仏教のすすめ2023年版」
（仏教書販売研究会2022年10月1日発行）より転載

ない」「多くの首を挙げよ」と厳しい叱責を受けている。

また空海以前には例外はありつつも、朝廷は基本的に大和を都としてきた。大和の旧来の豪族や寺院の旧勢力の影響力を離れるためであろう、桓武天皇は帰化系の根拠地に近い長岡京に遷都を決断する。そしてその造営を右腕の藤原種継にゆだねた。しかし長岡京造営の最中に藤原種継が夜間に弓で射殺されるという事件が起きる。大伴氏の関係者がすぐに捕縛され、大伴家持を首謀として種継暗殺を計画したという自供がなされ、大伴・佐伯氏を始め、多くの人々が処刑された。いわゆる藤原種継暗殺事件である。この後、桓武天皇は長岡京を放棄し、平安京に遷都することになる。

空海の記事を読みたいと思う読者にはやや長すぎるほど大伴・佐伯氏の歴史を描いてきた。それは、空海が『聾瞽指帰』を著したのは、桓武天皇の蝦夷征討と種継暗殺事件に対して氏族の立場から強硬に抗議するためであったからである。

国宝『聾瞽指帰』――紙と形式

ここで現在、金剛峰寺（こんごうぶじ）の所蔵であり、高野山霊宝館（れいほうかん）が管理する国宝『聾瞽指帰』について見ておこう。『聾瞽指帰』は空海自筆でないとする説もあるが、私は以下に述べるような理由から、空海真筆であると考える。国宝『聾瞽指帰』は縦簾紙（じゅうれんし）という特殊な紙に書かれている。縦簾紙とは紙に縦に簾（すだれ）のように筋をつけたものである。空海に近い時代の縦簾紙として光明皇后や嵯峨天皇の筆として伝えられる書跡が残っている。つまり縦簾紙は高貴な人が用いるものであった。この縦簾紙を用いたのは空海が桓武天皇に献上することを意図していたためと考えられる。さらに天皇に敬意を示すために天皇に関係する語に平出（へいしゅつ）や闕字（けつじ）といった、字をわざわざ開ける方法が用いられている。その他にも序文の「龍」「雨」の字も天皇を示唆するものとして行の冒頭に使われている。従来、『聾瞽指帰』は親族や母方の叔父の学者・阿刀大足（あとのおおたり）に出家の意思を示すとされてきたが、『聾瞽指帰』の紙や形式は公開、つまり天皇の御覧までを意図したものである。なにより、親族に見せるためだけに『聾瞽指帰』のような

若き日の心血が注がれた書を空海がなぜ著したのかは説明がつかないであろう。『聾瞽指帰』は空海が決死の思いで著した桓武天皇に対する諫言の書なのである。

『三教指帰』の登場人物と構成に見る諫言の意図

『三教指帰』で空海は登場人物として「実際には存在しない」という意味を名前とする、亀毛先生（儒教を説く）・虚亡隠士（道教を説く）・仮名乞児（仏教を説く）を登場させている。これらの三人が登場順に、後に登場する人物の方が前の人物が説く教えよりもレベルが高い教えを説くという構成になっている。このような登場人物の名前と三段構成は当時、官僚となるべく大学で学ぶものは誰もが知っていた司馬相如の「子虚上林賦」をモデルにしている。しかも空海は単に構想を借りたのではない。「子虚上林賦」は皇帝の奢侈を諫めるために書かれたものであり、このことも当時よく知られていた。空海が「子虚上林賦」をモデルに構成や登場人物を設定したのは、当時の読者にこの作品が諫言の意図を持っていることを示そうとしたものだった。さらに『三教指帰』には「無常の賦」「生死海の賦」といった賦という形式を用いて書かれた部分がある。当時、賦は「政治の善悪を述べる」ということも知られていた。そして空海が用いた典拠を当時の状況と照らし合わせると、空海は桓武天皇の二大政策を批判・諷刺していると言える。

桓武天皇とその取り巻きへの批判と諷刺

空海は始皇帝と漢の武帝をしかばねで楼閣ができ、血で川ができるほど殺戮を行った人物として描いている。桓武天皇の多くの政策は漢の武帝を模倣していることは天皇自身が表明している。そのためこのような描写は桓武天皇の蝦夷征討において首を多く上げることに歓喜する残虐な無道ぶりを諷刺している。

さらに空海は「良い政治がなされていれば死刑はなされない」「忠信・篤敬があれば蛮族の国でも立派な行いがなされる」という文脈を持つ『論語』の一

「仏教のすすめ2023年版」
（仏教書販売研究会2022年10月1日発行）より転載

節を引用している。これはそれぞれ種継暗殺事件における大量の処刑と、蝦夷征討を諷刺している。

空海は中国の故事として鶏鳴狗盗を用い、地獄では彼らは救ってくれないと述べている。この箇所はそのまま中国の故事としてとると唐突で不自然に思われるのだが、「狗盗」は蝦夷や土蜘蛛としての佐伯の形容でもあった。「狗盗」の語を用いることで、天皇や臣下は蝦夷に対して残虐な殺戮をしていると死後に厳しい報いがあると諷刺している。

さらに中国の都、長安の南西に位置する昆明池でこびへつらう佞臣は弓で射殺されると描写する。これは藤原種継が長岡宮の南西で射殺されたことを寓意していることは当時の人には明らかだっただろう。大伴氏は神話時代より弓矢を身につけ天皇を警護してきた。種継暗殺事件で弓矢で射殺された直後に大伴氏が捕縛されたのは大伴氏が弓術で著名だったからである。この事件には多くの不明な点があるが、桓武天皇が大伴氏を首謀者として糾弾したかったことは間違いない。空海は種継暗殺事件を暗喩して、佞臣は死後に厳しい報いを受けると訴えた。

『聾瞽指帰』において空海の憤懣が最も激越に表れている個所がある。朝廷にはびこる道に背く佞臣ども（桓武天皇によって重用された帰化系氏族）が正直・廉潔な臣下（大伴氏・佐伯氏）を讒言しているという。この箇所ではもはや諷刺を超えて、明確に朝廷を舞台として描き、佞臣に対する怒りをぶちまけている。『三教指帰』では朝廷を表す表現が「四倒・十悪」と仏教的表現に書き改められているため、そこからは佞臣に対する批判は分かりにくくなっている。しかし『聾瞽指帰』では極めて明確な佞臣への抗議である。それほど若き日の空海の憤懣はこの箇所に込められていたといえる。

以上のことは拙著で述べたことをごく簡略に述べたものであり、詳しい内容は拙著に直接あたっていただきたい。

桓武天皇は蝦夷の大量殺戮を命じ、多くの斬首がなされた報告を祝うように平安京への遷都を宣言した。そのような無道に対して、桓武天皇の臣下たちは唯々諾々とし、または絶賛した。おもねる臣下たちを空海は『聾瞽指帰』で痛

烈に批判する。これは忠をもって仕えた一族としての最後の誇りであった。空海は当初官僚として大学で学んでいた。官僚として忠を尽くすべき相手は桓武天皇であった。空海が官僚としての道を放棄することを宣言したのは、桓武天皇に忠を尽くすことを放棄することにほかならなかった。

若き日の空海とその後

今まで『三教指帰』は空海が中国古典の知識を衒学的（げんがくてき）にひけらかしたものと評価とされることもあった。しかし、中国古典の典拠を当時の歴史的文脈の中に置いて見ると、空海は桓武天皇の二大政策と天皇の周囲でおもねる臣下たちを痛烈に批判・諷刺していることが見えてきた。このような諷刺もまた祖先からの伝承に基づくものであった。大伴氏は神武天皇即位の日に「諷歌倒語（ふうかとうご）」という、なぞらえ歌と秘密の暗号を自己の氏族の役割にしたと『日本書紀』に記される。言葉や歌に表と裏の二重の意味を持たせることは大伴氏とその支族である佐伯氏の氏族伝承でもあった。空海が後に顕教と密教という「表面の教えと秘密の教え」という二重性を仏教に見て取り、言葉を重視する真言を教えの中核にしたのはこの氏族伝承に基づくとも言える。

仏教のゆくえ

今まで述べてきた私の『三教指帰』『聾瞽指帰』についての仮説はこれまでの理解と大きく異なるものである。そのため今後批判や検証をされていく必要がある。そうではあっても、『聾瞽指帰』を当時の時代状況に置いて見ることで、空海が大学を辞めて官僚の道を放棄するにあたって、若き空海が熱誠を込めて描いた『聾瞽指帰』の執筆の背景にいささかでも光を当てることができたと考えている。

そして、空海の思いは桓武天皇への表層的な批判にとどまらなかった。そもそも諫言は忠を持って命懸けで臣下が行うべきことである。古代氏族の名門につらなる空海のそのような意識は生涯変わらなかった。前近代において、最高権力者は単なる世俗の権威では成り立たず、世俗を超えた霊威（れいい）によって保障さ

「仏教のすすめ2023年版」
（仏教書販売研究会2022年10月1日発行）より転載

れるものであった。空海のころには天皇を守護する霊威が日本神話では不十分になりつつあった。桓武天皇はそれを儒教の儀礼に求めたが、すぐに途絶え継続しなかった。忠を持って天皇を守護するという空海の氏族意識は、仏教、そして密教を導入することによって天皇の聖性を保障する方向に向かった。その後、明治維新を迎えるまで前近代において、天皇の聖性は密教儀礼によって保障されることになる。空海は時代が大きく変わり、氏族の命運が衰えることを目の前にしつつも、きわめて長い視野を持っていたということができる。それは少なくとも明治維新で大きな断絶を受けるまで、千年以上にわたって受け継がれていった。

眼を最後に現代に向けよう。仏教も大規模な寺院の他は時代の流れの中で衰えていくことは避けられないだろう。東日本大震災やコロナ禍における仏教寺院の活動は一般の人々に記憶に残らないかもしれない。それどころか、期待に反して何もしなかったと言われる可能性もある。そこで小手先の延命をしようとしても、将来的に人々の支持を得ることはできないだろう。

空海生誕1250年をきっかけに空海の若い時代に改めて注目するとすれば、その意義は、空海が時代が大きく変わりゆく中でどのような視点を持ち、何を果たそうとしたかを謙虚に学ぶことにあると言えよう。